44

梅園資料館所蔵の医学書の紹介

佐藤　裕

平成十二年十月二十四日、大分県東国東郡安岐町の梅園旧宅に隣接して、待望の「三浦梅園資料館」が開館した。この資料館には、梅園の遺品（渾天儀や吉雄耕牛から贈られた木製顕微鏡など）、著書（梅園「三語」や造物余譚など）や多分野にわたる数多くの蔵書が、彼の遺した足跡と関連して展示されている（関連資料1）。

今回は、いわゆる「儒医」とされる三浦梅園が蒐集した（一部は医業を継いだ嗣子黄鶴が蒐集した）医学関係の図書、とくに当時の日本医学界に大きな影響を及ぼした蘭方関係の医学書を中心に紹介したい。なお、この発表の大部分は、昭和五十四年に地元安岐町教育委員会が慶応大学阿部隆一博士（文化財保護審議委員会専門委員）の指導のもとに編纂した「三浦梅園自筆稿本並舊蔵書解題」に拠ったことを付記しておく。

まず蘭方関係書としては、

○和蘭全軀内外分合図（竹井立輔画、本木良意訳、鈴木宗伝編・安永元年刊）。

○解體約図（杉田玄白撰、熊谷元章画・安永二年刊）。

○西説医範提綱釈義（宇田川榛斎訳、諏訪俊編・弘化二年刊）。

○扶氏経験遺訓（緒方洪庵訳・安政四年刊）。

○生理発蒙（島村鼎甫訳・慶応三年刊）。

○新薬百品考（坪井信良訳・慶応二年刊）。

○内科簡明（石川櫻所、石黒忠悳、林洞海訳・明治八、九年刊）。

なお、一部に梅園を「蘭学者」とする考えがあるようだが（たとえば、津山にある洋学資料館の展示には、梅園は「蘭学者」として紹介されている）、なるほど長崎への旅行滞在記である「帰山録」をみると、梅園が旺盛な好奇心をもって西洋の事物を実体験したことが書かれてあるが、梅園はそういう枠に捕らわれない「マルチ人間」であったという方が的を得ている。

解剖関連書としては、

○蔵志（山脇東洋撰・宝暦九年序刊）。
○解屍編（河口信任撰、餘浚明画・明和九年刊）。
写本として、
○医学天正記（曲直瀬玄朔撰）。
○青州先生金瘡治療口授（華岡青洲撰）。
○麻沸湯論（松岡肇撰）。
○養寿院驒験方（山脇東洋撰）。
○本草綱目記聞（小野蘭山撰）。
その他、
○医学指南篇（曲直瀬道三撰・寛政刊）。
○本草綱目（明李時珍撰、貝原益軒撰・寛文十二年刊）。
○紅毛雑話（森嶋中良撰・天明七年刊）。
○漫遊雑記（永富獨嘯庵撰・明和元年刊）。
○子玄子産論（賀川玄悦撰・明和二年刊）。
○刺絡編（荻野元凱撰・明和七年序刊）。
○南冥問答（亀井南冥撰・安永九年刊）。
○瘍科秘録（本間玄調撰・弘化四年刊）。
○医学啓蒙（帆足万里撰・嘉永三年）。
などがあげられる。

また、前述した吉雄耕牛から贈られた木製顕微鏡に関連してであるが、梅園が国東長崎間を往復した旅行の記録である「帰山録」には、日本初と考えられる顕微鏡図譜として「トウシミ（畳表の原料となる杵築特産の七島イのこと）」の切り口の断面観察図が載せられている（関連資料2）。

以上、平成一三年一〇月に地元安岐町にオープンした三浦梅園資料館所蔵の梅園蔵書のなかから、医学関係の図書を紹介した。どれも貴重かつ一級品の蔵書である。梅園の哲学世界に触れつつ、これらの貴重医学図書をみていただきたく願うものである。

関連資料1・梅園資料館の開館（日本医事新報、No. 4018、二〇〇一年四月二十八日号、六五頁）
関連資料2・三浦梅園のミクログラフィア（日本医事新報、No. 3837、一九九七年十一月八日号）

（北九州市立若松病院外科）